広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『オーベルマン』と芥川龍之介「軍艦金剛航海記」をめぐって
Author(s)	萩原，直幸
Citation	フランス文学 ， 33 ： 17 - 26
Issue Date	2021-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051032
Right	
Relation	

『オーベルマン』と芥川龍之介「軍艦金剛航海記」をめぐって[1)]

萩原　直幸

はじめに

芥川龍之介はセナンクールの小説『オーベルマン』を日本人として初めて読んだ一人と思われる。その読書の痕跡は紀行文「軍艦金剛航海記」において見られる。1916 年 12 月 1 日から 1919 年 3 月 31 日までの 2 年 4 か月、横須賀にあった海軍機関学校に英語教授嘱託として勤務した芥川は、1917 年 6 月 20 日夕方、航海見学のため、当時日本海軍最新鋭の軍艦金剛に乗り、横須賀から山口県の由宇に向け出港した。そのさい『オーベルマン』を携えて乗艦したのである。「軍艦金剛航海記」における『オーベルマン』への言及は、「（略）持つて来たオオベルマンの頁をはぐつてゐる間もやはりその考へは、僕をはなれない。」と「僕はオオベルマンを抛り出して眼を閉(つぶ)つた。」の 2 カ所のみである[2)]。きわめて限られた情報であるが、その読書と紀行文の関係を探ってみたい[3)]。

1. 芥川龍之介とフランス文学

芥川龍之介は東京帝国大学で英文学を専攻したが、英米文学のみならず、ドイツ、フランス、ロシア等の文学作品を読み、とりわけフランス文学に親しんでいた。回想文「仏蘭西文学と僕」[4)]によると、若いころ、ドーデ、アナトール・フランス、フロベール、ゴーチエ、シャトーブリアンといった 19 世紀の文学者を中心に、少しさかのぼってルソー、ヴォルテール、さらにはモリエール、モンテーニュまでも読んだという。これらフランスの作家の作品はもっぱら英訳で読んでいたようである。第一高等学校では文科乙類、すなわちドイツ語が第 1 外国語のクラスにいた。フランス語についてはどうだったのだろうか。「仏蘭西文学と僕」に

---

1) 本稿は 2019 年 12 月 5 日、香川大学を主催校とし、新型コロナウイルス感染予防のためオンラインで開催された日本フランス語フランス文学会中国・四国支部大会にて行った口頭発表をもとに、大幅に加筆・修正をしたものである。司会の芥川龍之介研究者マリ＝ノエル・ボーヴィウ氏（広島大学）から貴重なコメントと質問をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。
2) 『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1996、p.220。
3) 塚本章子「芥川龍之介「軍艦金剛航海記」論 ― 第一次世界大戦と軍備拡張の時代の中で―」（『国文学攷』第 225 号、2015、pp.1-14）という優れた先行論文から多くの教示を受けた。ただ、『オーベルマン』との関連で一部見解を異にする部分もあることを本稿において示してゆく。
4) 『芥川龍之介全集 第七巻』岩波書店、1996、pp.243-246。

よると、フランス語もある程度は読めたらしい[5]。

授業のかたわら、芥川は一高図書館、帝国図書館、さらには丸善にしばしば出かけて書物を渉猟した。特に 19 世紀末文学書を愛好し、懐疑主義、厭世主義的傾向を助長させていた。大学では専攻する英文学関係の文献を読み続けてゆくが、英文学の講義にはあまり興味が持てず、むしろ哲学や美学の講義に出席していた。また、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』も愛読していた。当時の自然主義文学にあきたらなさを感じ、一高時代からの親友である菊池寛、久米正雄、成瀬正一（後に初代九大仏文科教授）らと出した文芸雑誌『新思潮』にアナトール・フランスの「バルタザアル」を英訳から重訳して発表した。また、テオフィル・ゴーチエの「死霊の恋」*La morte amoureuse* を英訳から重訳した「クラリモンド」が『クレオパトラの一夜』（新潮社）に掲載されている[6]。

2.『オーベルマン』との出会い

芥川が帝大の英文科に在籍していたとき、仏文科の教授はフランス人のエミール・エックであった。カトリックの神父であったエックが、カトリック教会と教義に批判的だったセナンクールについて講義した可能性は極めて低い。初代日本人教授・辰野隆は、フランス遊学から帰国して「19 世紀フランス文芸思潮」の講義をした。主としてロマン主義時代の孤独感について解説し、『オーベルマン』の一節も引用・紹介したが、それは芥川の卒業後のことである[7]。高校・大学在学中に講義で『オーベルマン』の存在を知ったのでないとすれば、ブッキッシュな芥川のことだから、やはり書物を通して知識を得たのではないだろうか。しかし、その時代に幅をきかせていたブリュンチエールの『フランス文学史序説』には、スタール夫人やバンジャマン・コンスタン、シャトーブリアンの名や作品は登場するが、彼らと同世代のセナンクールや『オーベルマン』は触れられていない。そこでわれわれは、芥川の旧蔵書である「芥川龍之介文庫」[8] に著作が収められている西洋の 3 人の批評家、サント＝ブーヴ、マシュー・アーノルド、ゲオルグ・ブ

---

[5] 吉田城「芥川龍之介におけるフランス文学の受容― 旧蔵書、ジャポニザンへの視線」『小説の深層をめぐる旅　プルーストと芥川龍之介』岩波書店、2007、pp.176-205 も参照。
[6] 宮坂覺「年譜」『芥川龍之介全集 第二十四巻』岩波書店、1996、 pp.72-84。
[7] 市原豊太「辰野隆先生」『内的風景派』、文藝春秋、1972、 pp.212-213。なお、芥川と辰野との関わりについて、柏木隆雄氏は、芥川の俳句「青蛙おのれもペンキ塗り立てか」が、ルナール『博物誌』における「青蜥蜴　ペンキ塗り立て！」から発想されたものであるという辰野の定説から説き起こし、それに異議をはさみ、芥川はルナールをフランス語で読んでいた可能性が高いことを論証している。柏木隆雄「芥川龍之介とルナール」『交差するまなざし――日本近代文学とフランス――』朝日出版社、2008、pp.294-308。
[8] 日本近代文学館（編）『芥川龍之介文庫目録』日本近代文学館、1977、参照。

ランデスに注目してみる。

まず、フランスのサント＝ブーヴである。彼の批評家としての業績は膨大なものであるが、その一つにセナンクールとその『オーベルマン』の再評価がある。この小説は 1804 年に刊行されたがなんら反響がなかった。しかし、1833 年にサント＝ブーヴによる序文を付して刊行された第 2 版によって注目され、当時の文学者のみならず、ロマン派の芸術家たちに影響を与えた。例えば、ジョルジュ・サンドは『オーベルマン』の女性版とも言われる小説『レリア』（1833）を書き、また自身の『オーベルマン』論が 1840 年の『オーベルマン』第 3 版の序文として掲げられた。また、作曲家のフランツ・リストは、1835 年、愛人マリー・ダグー夫人とスイスに駆け落ちし、その地を旅行した時に得られた印象をもとにしてピアノ曲を作曲した。1855 年に『巡礼の年 第一年：スイス』としてまとめられたが、そのアルバムには「オーベルマンの谷」*Vallée d'Obermann* と題する曲がおさめられている。芥川は学生時代、ときどきコンサートを聴きに行っていたが、回想文「あの頃の自分の事」には、コンサートでリストのドイツ語題名のピアノ曲を聴いた時の印象が綴られている [9]。なお、芥川はサント＝ブーヴの主著『月曜閑談』とフランス 17 世紀の文学者に関する本の英訳を所蔵していた。

次に、マシュー・アーノルドについて見る。芥川は英文科の卒業論文でウイリアム・モリスを扱った。今日ではもっぱらアーツ・アンド・クラフツ運動を主導したデザイナーとして知られるが、詩人でもあった。そしてマシュー・アーノルドも同様にヴィクトリア朝の詩人であり批評家であった。

アーノルドはフランス文学への造詣が深かった。サント＝ブーヴと親交があり、その影響を受けてセナンクールとその『オーベルマン』に興味を抱いた。アーノルドはセナンクールが没した 3 年後に彼を讃える詩 “Stanzas in Memory of the Author of ‘Obermann’ ”（1849）を、さらにその 20 年後に“Obermann Once More”（1867）と題する長い詩を残している [10]。一方、サント＝ブーヴの方も、著書『シャトーブリアンと帝政期における彼の文学集団』の 14 章において、セナンクールと『オーベルマン』について論じているが、その章の最後にマシュー・アーノルドの前者の詩のフランス語訳を引用しているのである [11]。

なお、1910 年、J・アンソニー・バーンズが『オーベルマン』を英訳して出版したさい、序文 Introduction の冒頭においてマシュー・アーノルドの 2 篇の詩に言及

---

[9]『芥川龍之介全集 第四巻』岩波書店、1996、p.133。
[10] 渡辺栄太郎「アーノルド長編哀歌「オーベルマン」と「オーベルマン再詠」」『大東文化大学紀要』第 38 号、1999、pp.231-246、参照。
[11] Sainte-Beuve, *Chateaubriand et son groupe littéraire sous l'Empir*e, Garnier Frères, 1861, Tome second, pp.365-370.

し、「マシュー・アーノルドの読者は皆この 2 つの詩篇に興味を掻き立てられたことだろう」と述べている [12]。芥川はアーノルドの著書 *Essays in criticism* を所蔵していた。このようなことから、彼がアーノルドを通してセナンクールや『オーベルマン』について知った可能性も否定できない。

最後に紹介するゲオルグ・ブランデスはデンマークの文学史家・批評家である。1872 年から 1890 年にかけて著された『19 世紀文学の主潮』の第 1 巻には、ルソー『新エロイーズ』、ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』、シャトーブリアン『ルネ』、スタール夫人『コリンヌ』、バンジャマン・コンスタン『アドルフ』などと並んでセナンクール『オーベルマン』に関する章が設けられている。アルプスの情景や、人間という滅びる定めの存在に関するフレーズなど、『オーベルマン』を代表するようなパッセージが目配りよく引用されている。芥川は『19 世紀文学の主潮』の英訳（1906）6 巻を所有していた。さらにタイミングのよいことに、彼が金剛に乗艦する 2 年前の 1915 年に吹田順助による翻訳が内田老鶴圃から出版されていた。なお、ブランデスはニーチェに関する連続講演を行っている。そして芥川はニーチェに関心を寄せていた [13]。これについてはまた後ほど触れる。

以上、西洋の 3 人の批評家たちを通して芥川が『オーベルマン』を知り、興味を惹かれた可能性について述べた。芥川は自宅に多数の洋書を取りそろえ、フランス文学をはじめ、欧米文学へ目配りを怠らず、自分の創作の肥やしとしていた。ただし、肝心の『オーベルマン』については、原文はおろか英訳も芥川龍之介文庫には収蔵されていない。芥川が『オーベルマン』を所有していたとすれば、散逸してしまったのだろうか。あるいは友人や知人、例えば海軍機関学校の同僚でフランス語教授の豊島与志雄から借りたのであろうか。それとも、いずれかの図書館から借り出したのであろうか。

3.「軍艦金剛航海記」と『オーベルマン』

芥川が海軍機関学校教官として軍艦金剛に乗艦することになったとき、すでに『オーベルマン』の読書を始めていたのだろうか [14]。それとも乗艦に際し、何か思い立ってこの書物を手に取ったのだろうか。手がかりとして、芥川とセナンク

---

[12] *Obermann*. By Étienne-Pivert de Senancour. Translated, with Introduction and Notes, by J.Anthony Barnes, B.A.., London, The Walter Scott Publishing Co. Ltd., 1910, vol. I, p.v.

[13] 杉田弘子「芥川龍之介とニーチェ」、東京大学教養学部『教養学科紀要』三輯、1970、pp.119-141、参照。

[14] 宮坂、前掲「年譜」によると（p.100）、1917 年 6 月 20 日、午後に軍艦金剛に乗り込む日、「鎌倉の下宿で、August Strindberg “Legends; autobiographical sketches”を読了」とあるので、その可能性は低いであろう。

ール、そして「軍艦金剛航海記」と『オーベルマン』を比較対照してみたい。

まず作者について検討する。芥川とセナンクールには顕著な類似性は認められない。しいて言えば、セナンクールが父親から勧められた神学校行きを不服としてスイスに出奔したのに対して、芥川が海軍機関学校での教官生活に見切りをつけて、2年4か月という短さで辞職したことが挙げられる。自分になじまないキャリアに妥協しない、ということである。

次に作品を比較してみる。まず形式的には、「軍艦金剛航海記」は紀行文というノンフィクション、『オーベルマン』は書簡体小説というフィクション、という違いがある。しかし、書き手・語り手が見聞したことをレポートするという点では類似する。ここでは両者の自然描写に焦点を当ててみよう。芥川が乗艦した金剛は横須賀から出港し、翌々日、瀬戸内海に入った。海の色が濃い藍色から美しい緑青色にかわり、「円い山の形が茶碗を伏せたやうに浮き上がつてゐる」[15]という風景の記述は、いっけん讃岐富士を思わせるが、実際はどうだっただろうか。いっぽう、『オーベルマン』にはアルプスの峰々や湖、フォンテーヌブローの森など、自然描写が豊富である。芥川は「景色が visualize（眼に見えるように）されて来る文章が好きだ。そういふところのない文章は嫌ひである。」[16]と述べているが、『オーベルマン』における風景描写は芥川のお気に召したかもしれない。塚本章子氏は「軍艦金剛航海記」における瀬戸内海の描写が『オーベルマン』手紙 2 におけるレマン湖の描写と類似しているという興味深い指摘をしている [17]。レマン湖の東西幅は 72,8 km、最大南北幅は 13,8 km、いっぽう瀬戸内海の東西幅は 450km、南北幅は 15 km から 55 km であり、スケールは異なるけれども、瀬戸内海の最小南北幅（備讃瀬戸）とレマン湖の最大南北幅は値が近いので、その海域に限れば、距離感は近いかもしれない。ただし、金剛は超弩級の軍艦であり、紀伊水道から鳴門海峡を抜けて瀬戸内海に入ったのではなく、豊後水道から瀬戸内海に入ったのだった。してみると、「茶碗を伏せたよう」な「円い山の形」は讃岐富士ではなく、山口県の、おそらく防州あたりの山の描写だったと思われる。『オーベルマン』の語り手（「手紙」の書き手）は、夕方、レマン湖北岸のローザンヌ近郊から南側対岸のサヴォワ地方の山を見晴るかしたのに対して、芥川は、朝方、瀬戸内海を航行する艦上から北側の山を見やったのである。さて、塚本氏は、「軍艦金剛航海記」と『オーベルマン』の自然描写を比較するさい、市原豊太訳を引用しているのだが、市原訳が出たのは 1940 年である。そこで芥川の紀行

---

15)『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1996、p. 222。
16)「眼に見えるような文章――如何なる文章を模範とすべき乎――」『芥川龍之介全集 第三巻』岩波書店、1996、p. 154。
17) 塚本章子、前掲論文、p.10。

文、市原訳、フランス語原文、英訳を、紙幅の関係で必要最小に限って掲げてみる（太字による強調は引用者）。

> そこへ一面に淡い**靄**が下りて、其**靄**の中から円い山の形が茶碗を伏せたやうに浮き上がってゐる。[18]

> **靄**がサヴォワ側のアルプスを一部蔽つてゐて、山は**靄**と溶け合つたやうになり、それと同じ色合ひに包まれてゐる。[19]

> Des **vapeurs** voilaient en partie les Alpes de Savoie confondues avec elles et revêtues des mêmes teintes.[20]

> The Alps of Savoy were partly veiled by **clouds** indistinguishable from themselves and of the same tint.[21]

芥川の紀行文における「靄」から塚本氏が差し向けた市原訳『オーベルマン』の「靄」に対応する原文は vapeurs（蒸気）であるが、英訳では clouds（雲）となっており、フランス語原文の方が語感として近いのではないか。芥川はあんがい英訳ではなくフランス語原文で読んでいたという推測も許されるであろう [22]。なお、『オーベルマン』原本のうち出版年が最も近く芥川が手に取った可能性が比較的高いと思われる版はギュスターヴ・ミショー校訂版（第 1 巻 1912、第 2 巻 1913）である。

次に、時代背景について比較する。両作品の間には百十数年の隔たりはあるが、戦争の時代に書かれたという共通性があげられる。「軍艦金剛航海記」が執筆された 1917 年は第一次世界大戦の最中であり、『オーベルマン』が執筆されたと思われる 1798 年頃から 1803 年頃にかけては、ナポレオン戦争が遂行中であった。日本は当時、1894 年の日清戦争、1904 年の日露戦争に勝利し、第一次世界大戦ではドイツ領南洋諸島に進出した。ナポレオンはイタリア戦線等で勝利をおさめていた。大日本帝国、フランス（1804 年より帝国）、ともに戦争に沸きかえり、領土拡張ムードにあった。（だが、その後、ナポレオンはモスクワ遠征に失敗し、日本は太平洋戦争に敗北することになるのであるが。）このように、両作品とも戦

---

18) 『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1996、p.222。
19) セナンクール作、市原豊太訳『オーベルマン 上』岩波書店、1940、p.44。
20) Senancour, *Obermann*, Charpentier, 1840, p.13.
21) *Obermann*. Translated by J.A.Barnes, t.1, p.12.
22) それゆえ必ずしも得意ではないフランス語本を「抛り出し」た（後述）、とはあえて言わない。

争の時代を背景に書かれているが、しかし、戦争が直接描かれることはない。「軍艦金剛航海記」では海軍機関学校教官としての立場からか、軍備拡張への批判は表立ってなされないけれども、教室における芥川の態度はもっとはっきりしていた。生徒の証言によると、英語の授業の教材に用いるものは、普仏戦争にまつわるものなど、すべて敗戦の物語であり、衰亡の歴史だった。それゆえ芥川教官は生徒から「敗戦教官」とあだ名されていたという[23]。

いっぽう、『オーベルマン』でも革命や戦争は直接には触れられない。しかし暗示はされる。例えば手紙 41 には人民を戦争に動員する統治者への批判が見られる[24]。これはナポレオンへの暗示であろうか。戦争のかげには、無辜の人民の犠牲があることを、セナンクールは慎重な筆遣いで伝えているようだ。ナポレオンが皇帝の座に就いたのは 1804 年、『オーベルマン』が出版されたのも同じ 1804 年であることは興味深い[25]。

最後に、自殺の問題について付言しておきたい。『オーベルマン』の訳者でもある市原豊太は、「軍艦金剛航海記」に『オーベルマン』への言及があったことに関連して、「感動を愛する好奇心は、このやうな場合、芥川氏の運命とオーベルマンとを紅い絲で結びつけたがるが、それはやはりつまらないことである。」と述べている[26]。「芥川氏の運命」とは言うまでもなく彼の自殺を意味し、「オーベルマン」とは、特に手紙 41 で展開された自死に関する考察を指すであろう。そしてそれらを結び合わせるのは「つまらないことである」というのだ。そうかもしれない。ただ、ここには芥川龍之介という文学者の核心部分に迫る問題が秘められているようにも思われる。少しく両者を対比してみたい。1770 年生まれのセナンクールは 1804 年、34 歳の時に『オーベルマン』を出版した。芥川は『オーベルマン』手紙 41 を読んだだろうか。読んだとすればどのような感想をいだいたのだろうか。彼は後年、『侏儒の言葉（遺稿）』の自殺に関する連続した断章において自殺することの難しさをアフォリズム風に説く[27]。しかし 35 歳の若さで自死を遂げるのである。『オーベルマン』手紙 41 では、自死の是非についての議論が、アフォリズム風ではなく、粘り強く展開されている。それは一種の思考実験

---

23) 諏訪三郎「敗戦教官芥川竜之介」『芥川追想』岩波書店、2017、pp.344-358、参照。
24) Senancour, *Obermann*, p.186、参照。
25) バンジャマン・コンスタン『征服の精神と簒奪』（1814）も参照（堤林剣・堤林恵訳『近代人の自由と古代人の自由　征服の精神と簒奪　他一篇』岩波書店、2020）。なお、セナンクールは 1815 年、百日天下のさい、内戦回避の観点からナポレオンを擁護する発言をしている。Senancour, « De Napoléon » in *Œuvres complètes*, Tome VI Brochures politiques (1814-1815), Classiques Garnier, 2018, pp.131-142、参照。
26) 市原豊太「オーベルマン」東京帝国大学仏蘭西文学研究室（編）『仏蘭西文学研究』第 4 輯、1928、p.115。
27)『芥川龍之介全集 第十六巻』岩波書店、1996、p.76。

であり、自死の可能性について徹底的に理詰めで論ずるものであった。けっきょく自殺は決行されるに至らず、作品の結末近く、主人公（語り手 ＝「手紙」の書き手）は著作活動という自分のミッションを見出す。作者のセナンクールは新聞・雑誌等への原稿執筆で糊口を凌ぎ、生活に苦労しつつも、『人間の原初的性質に関する夢想』、『恋愛論』、『自由な瞑想』等を著し、改訂を続け、76 歳までの生涯を生ききったのであった。

4. 芥川龍之介と『オーベルマン』

やや長くなるが、以下が「軍艦金剛航海記」において『オーベルマン』が言及される箇所である。

> 砲塔、水電室、無線電信室、機械室、汽缶室（かましつ）——勘定するばかりでも、容易な事ではない。それがどこへ行つても、空気が息苦しい位生暖かくつて、いろんな機械が猛烈に動いてゐて、鉄の床や手すりが油でぴかぴか光ってゐて、僕のやうな労働に縁の遠いものは、五分とそこにゐると、神経にこたえてしまふ。が、その間に絶えず、或る考へが僕の頭にこびりついてゐた。それは欧洲の戦争が始まつて以来、僕位の年齢のものが大抵考へるようになつた、或る理想的な考へである。今このケビンの寝台の上にころがつて、くたびれた足をのばしながら、持つてきたオオベルマンの頁をはぐつている間もやはりその考えは、僕をはなれない。（中略）何だらうと思つて、ハツチを上つて見ると、第四砲塔のうしろに艦中の水兵が黒山のやうに集まつていた。さうしてそれが皆、大きな口をあいて、「勇敢なる水兵」の軍歌を唱つていた。ケエプスタンの上に、甲板士官がのつてゐるのは、音頭をとつているのであらう。こつちから見ると、その士官と艦尾の軍艦旗とが、千人あまりの水兵の頭の上に、曇りながら夕焼けのした空を切りぬいて、墨を塗つたやうに見えた。下では皆が、塩辛い声をあげて、「煙も見えず雲もなく」とうたつている。僕はこの時も亦、その或る考へに襲はれた。勇ましかる可き軍歌の声が、僕には寧ろ、凄壮な調子を帯びて聞こえたからである。
>
> 僕はオオベルマンを抛り出して眼を閉つた。艦は少し揺れはじめたらしい。[28]（下線による強調は引用者）

芥川はわざわざ艦内に持参した『オーベルマン』をなぜ「抛り出した」のだろうか。そして「眼を閉った」のだろうか。セナンクールにとってやや不名誉なこの記述の意味について考えてみたい。

「或る（理想的な）考へ」が 3 回にわたって言及され、それが「僕をはなれな

[28]『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1996、pp.219-220。

い」、それが気になって読書に集中できなかった、という語りの流れである。ここで語られる「或る理想的な考へ」とは何であろうか。塚本章子氏によると、それは社会主義思想を暗示するとのことである [29]。確かに、1910 年の大逆事件以降、政府の社会主義に対する警戒は強められていた。おりしも 1917 年、ロシアには革命が起きて共産主義国家が樹立されたのだった。よってこの指摘に大きな誤りはないであろう。しかし同時に、「欧洲の戦争が始まって以来」という年代の限定からすると、「理想的な考え」とはむしろ、芥川が愛読した『ジャン・クリストフ』や『トルストイの生涯』の作者ロマン・ロランが提唱していた平和主義思想を指すとも考えられ得る。彼がスイスから仏独両国に対して「戦闘中止」を訴えた『戦いを超えて』*Au-dessus de la mêlée*（1915）の英訳 *Above the Battle*（1917）を芥川は所蔵していた。「勇ましかるべき軍歌の声が、僕にはむしろ、凄壮な調子を帯びて聞こえたからである」という文からも、将来の戦争において前線に派遣される兵士たちの運命を慮っていたと思われるのである。

最後に、塚本氏は、芥川は「世の中と一線を画し美を求めて孤高に生きる道」をたどり、「職業を捨て、美の世界や真実の生を希求し旅に出る憂鬱な青年という点で見れば、彼もまた一人のオーベルマンであった」とまとめ、芥川における『オーベルマン』読書体験を積極的に評価している [30]。氏は『オーベルマン』と芥川をよく理解した上で、両者に共通なこととして「孤高に生きる」ことをあげている。ただ気になるのは、芥川が「オオベルマンを抛り出し」た点である。

一高時代にドイツ語を第 1 外国語とし、ニーチェの『ツァラトゥストラかく語りき』を原書で読んでいた芥川は、『ツァラトゥストラ』の中に超人（ドイツ語で Übermensch、英語で Overman）思想を見出し興味を覚えた。そのような彼が『オーベルマン』というタイトルに興味を惹かれてこの書を手に取ったことは十分想像される [31]。芥川はなんらかの期待を持って『オーベルマン』を手に取ったのであろう。しかし、彼は「オオベルマンを抛り出し」た [32]。それは、一義的には『オーベルマン』という本を放り出すことを意味する。が、そのような身振りをことさら記すということは、象徴的に「オーベルマン的な生き方は採らない」と宣言

---

29) 塚本、前掲論文、p.7。
30) 塚本、前掲論文、pp.12-13。
31) 1833 年の改訂時には n が重ねられ（*Obermann*）、ドイツ語風の響きを持ったものとなった。なお、タイトルのみならず、内容においても、ニヒリズムという思想史的観点から、ニーチェはセナンクールの延長線上にあると考えられる。1770 年生まれのセナンクールは 18 世紀啓蒙主義思想の洗礼を受け、カトリックの教義や教会、聖職者のあり方に疑問の目を向けるようになった。ニーチェのキリスト教批判についてはあらためて言うまでもない。
32)「軍艦金剛航海記」の中で言及される他の文学作品は、「天地有情」や「パラダイス・ロスト」というように題名にカッコが付されているが、『オーベルマン』にはそれがない。

するに等しいことにはならないだろうか[33]。

むすびにかえて

最後に、視点を変えて、思想の書としてよりも物語として『オーベルマン』を見るならば、子どものころから『八犬伝』や『西遊記』といった物語を好んで読み、フランス文学作品の中でも、ゴーチエの『死霊の恋』のような怪奇小説を訳した芥川にとって、『オーベルマン』には端的に言って物語としての面白みが欠けていたのではないだろうか。たとえ社会主義や革命、戦争や平和のことなどが気がかりであったとしても、あるいは逆に、現実が気がかりなものであればあるほど、物語としての面白さがあったなら、現実を忘れて読書に没頭できたはずである。芥川にとって『オーベルマン』はそのような文学のエンターテイメントとしての要素に乏しかった。わざわざ艦内に持参した『オーベルマン』を「抛り出し」たと書いてみせるところに、芥川の『オーベルマン』評をかいまみる思いがするのである[34]。

---

[33] 芥川は海軍機関学校を辞したのち、大阪毎日新聞社社員となり、中国に海外視察員として派遣され、「上海游記」や「江南游記」などのジャーナリスティクな仕事もこなすことになる。それなりに時代や社会に関わるのである。

[34] 芥川は後年、谷崎潤一郎と「小説の筋の芸術性」をめぐる論争をし、その一部が「文芸的な、余りに文芸的な」に収録されている（『芥川龍之介全集 第十五巻』岩波書店、1996、pp.147-229）。すなわち、小説における筋の面白さを重視する谷崎に対して、芥川は筋の面白さが小説の芸術的価値を強めるということはない、とした。両者の議論は噛み合っていないように思えるのだが、ともあれ、芥川の初期作品には、「羅生門」「鼻」「芋粥」など、話の筋やオチはしっかり存在する。なお、『オーベルマン』は、一見、孤独な散歩者の夢想のような体裁を呈しているが、憧れていた女性が別の男性と結婚したことへの未練、夫と死別して自由の身となった彼女との再会、その時に取った彼の決断、などの隠れた「筋」が存在するのである。